

大明宮・洛陽宮跡の遺跡整備 現況調査

遺跡整備研究室では、海外の遺跡整備の情報収集のため10月に中国の西安・洛陽を調査しました。

西安市内の唐長安城の宮殿であった大明宮跡は2010年に大明宮国家遺跡公園(3.2km²)として公開されました。事業費は120億元、その約3分の2が立ち退き等の費用で残りが整備費とのことでした。

正門の丹鳳門跡は兩脇の城壁とともに、上部の本来の外観をイメージした一回り大きい覆屋が設置され、遺構が観察できるとともに、門楼内部は赤い絨毯が敷き詰められた大ホールとなっていました。基壇復原した含元殿跡の北側には地下式の遺跡博物館が設置され、紫宸殿跡は建物の骨格を部分的に示す工作物と樹木で表現されていました。遺構保護のため幾分か狭くなったようですが、太液池には水が張られ、蓬萊島も復原されていました。各所に建築模型や大きな復原CG画像を描いた大きな看板が設置され、当時の様子がイメージできるようになっています。大明宮全体の1/15模型は100m四方もある敷地に1,100棟の建物を配置しています。

洛陽も国家遺跡公園として整備を進めています。洛陽城の正門跡も覆屋式で整備され、洛陽宮正門跡は工事中でした。正殿は則天武后が建てた明堂跡で、大規模な覆屋が建てられ、その北西に高さ89mの5層9階の天堂が外観復原され、ともに1階内部は心礎遺構展示をおこなっていました。宮庭の庭回である九州池の工事も造成が進んでいました。

遺跡整備は地域振興や観光振興、国家の文化戦略にも不可欠です。両都の整備を見て感動するとともに、東京五輪も近い国内の史跡等の整備費を思うと焦りを感じました。(文化遺産部 内田 和伸)



洛陽宮跡の天堂と明堂跡遺構展示館

東京講演会を開催

10月24日に東京の有楽町朝日ホールにおいて、「発掘遺構から読み解く古代建築」と題した東京講演会を開催しました。

2010年に竣工した平城宮第一次大極殿は、今や平城宮跡のシンボルとして国内外の皆様から親しまれています。

復原された第一次大極殿は、平城遷都1300年の節目にふさわしい古代建築に関する緻密で高度な学術研究の成果が結実した建物となりました。復原に向けた調査・研究には20年の月日をかけて取り組み、建築史の研究の進展に寄与する数々の成果をもたらしました。

近年、全国各地の史跡でも建物の復原や整備活用事業が進められています。建物の復原の場合だけでなく、イラストやCG、模型の製作等でも、建築史の知識や情報が不可欠です。このような建築史の研究は、一般には知られていないのが実情です。

今回の講演会では、発掘された地下遺構から失われた地上の建物をどのように復原できるのか、というテーマにしました。6名の研究員が発掘遺構や出土建築部材、現存する文化財建造物、絵画資料や文献史料等の調査・研究を通して建物の復原研究に取り組む建築史研究者の仕事ぶりと研究の舞台裏も交えて話しました。また、平城宮の朱雀門や第一次大極殿の復原研究のプロセスや復原根拠、これから復原工事が本格化する第一次大極殿院の南門や東西楼、築地回廊等の復原研究の最新成果、遺跡から出土する建築部材をめぐる研究等についても紹介しました。

当日、345名の方が来場され、メモを取りながら熱心に聴き入る方も多く見受けられました。

(研究支援推進部 津田 保行)



東京講演会風景